

榎法華(とどほっけ)における言語と風習 : 失われゆく伝統(3)

その他(別言語等)のタイトル	Endangered Dialect and Tradition in Todohokke(3)
著者	島田 武, 橋本 邦彦, 寺田 昭夫, 塩谷 亨
雑誌名	室蘭工業大学紀要
巻	54
ページ	79-90
発行年	2004-11
URL	http://hdl.handle.net/10258/68

榎法華(とどほっけ)における言語と風習 : 失われゆく伝統(3)

その他(別言語等)のタイトル	Endangered Dialect and Tradition in Todohokke(3)
著者	島田 武, 橋本 邦彦, 寺田 昭夫, 塩谷 亨
雑誌名	室蘭工業大学紀要
巻	54
ページ	79-90
発行年	2004-11
URL	http://hdl.handle.net/10258/68

楳法華（とどほっけ）における言語と風習—失われゆく伝統(3)

島田 武*1, 橋本邦彦*1, 寺田昭夫*1, 塩谷 亨*1

Endangered Dialect and Tradition in Todohokke(3)

Takeshi SHIMADA, Kunihiko HASHIMOTO,
Akio TERADA and Toru SHIONOYA

(原稿受付日 平成 16 年 5 月 17 日 論文受理日 平成 16 年 8 月 31 日)

Abstract

This article is the third report of urgent survey on the Todohokke Dialect, which is considered one of the endangered dialects in Japan. The present study describes phonetic properties and gives a presentation of vocabulary and folkloristic customs in Todohokke to preserve its linguistic features and other precious heritage and tradition: “Mazu” or “mazi,” one of the discourse markers in Todohokke Japanese and the central vowel in it, [i]; “Kaigarakai,” the class reunion which was prestigious in Todohokke.

keywords: Todohokke dialect, standardization, class reunion, discourse marker

1. 緒言

急速な標準語化の拡大及び方言知識が豊富な話者の高齢化による方言の衰退は、ますます加速している状況にあり、そのような衰退しつつある日本語の諸方言の調査研究の緊急性は以前にも増して大きなものになっている。加えて、これまで継続的に調査研究の対象としてきた亀田郡楳法華村は平成 16 年 12 月に戸井町、恵山町、南茅部町と共に函館市と合併することが決定し、更には町名表記から楳法華の名前が消えることも合意されている。楳法華の名前が消えることは地域住民のアイデンティティにも少なからぬ影響を及ぼすことが予想され、や

がては楳法華方言の話者という言語的なアイデンティティにも影響していくと推測される。このような状況の中で、楳法華の方言の調査研究の緊急性は一段と高まっていると言える。

平成 12 年 7 月に道南渡島東岸部方言調査チームを発足させ、平成 12 年 9 月に行った第一回調査から継続的に調査研究を続け平成 16 年 3 月に行った最近の調査まで合計五回の調査をいずれも楳法華村で行なった。本稿はこれまでの調査研究に基づく成果発表の第三回目である。

2. 談話テキストと覚書

以下に、第 2 回調査（平成 12 年 12 月 1 日実施）で記録された談話テキストを掲載する。内容は、子

*1 共通講座

供時代の思い出に関するもので、主に、男女の遊び、学校生活、同級生との交流などである。被調査者は、第1回調査の時と同じく榎法華村在住の船大工、玉村栄吾さん（大正15年生まれ）のほかに、長政スゲ子さんにも加わっていただいた。長政さんは、玉村さんと同級生で、10代の頃に数年間福井県の紡績工場で働いた以外は、ずっと榎法華村で暮らしてきた。今回は、約70分の録音の前半部分をカナ表記し、標準口語訳を付した。橋本が最初に音声資料に基づいてカナ起こししたものを、寺田が詳細にチェックし修正を施した。その後、橋本と寺田とで訳出作業をした。インタビューは自然な流れで実施されるように配慮したので、二人の被調査者の言葉はかなり聞き取りづらい部分があるため、聴解困難な箇所はいたずらに推測や主観的な解釈はせず、空白のままにした。今後被調査者自身に確認を取りたい。

2.1. 談話テキスト

以下のテキスト内のTは玉村栄吾氏、Nは長政スゲ子氏の発話を表している。

2.1.1. 昔の働き口について

T1:オナゴサンダッデ ケッコーイルンダヨナー。

女の人も たくさんいるんだよな。

N1:イル。ココデウマレデ ココサトツイデ

いる。ここで生まれて ここへ嫁に来て

ミナガラ イルンダケドー。

みんな一緒にいるんだけど。

ミナ ヤッパ クラシガイガッタカラ

みんな やはり 暮らしぶりが楽だったから

ドガコガネ。 オヤガイレバ ムスメバ

どうにかこうにかね。親がいれば 娘を

ソナナニハナセネンダ。

そんなに（内地へ） やったりはしないんだ。

ボーセキサー ナドッテー。

紡績だとか なんだとか。

T2:フクイケンダカラナ。

福井県だからね。

Q:働き場所としては、榎法華ではなく福井県の紡績工場の方が待遇がいいのですか。

T3:イヤ ハダラグテユーヨリモ

いいや働くとか働かないという問題ではなくて

ハダラグドゴ ネーンドモン。

働く所がないんだから。

Q:地元には働くところがないのですか。

N2:ゼンゼン。

全然。

T4:ハルノカツオホシトカ。オレダラ オボエテ

春の鰹干しとか。 おれたちが 覚えて

ルハンイデワネ。

いる範囲ではね。

アレワ マソダ マズ デメントリタイッテ。

あれは まだ まず 日雇いの仕事をしたがって。

イマユー アルバイトシタイテ。 イマノ

今で言う アルバイトをしたたって。今の

コトバデユッテモ ソレガ ネーワケナノサ。

言葉で言っても それが ないわけなんだ。

ハダラグドゴガ ネーワケナノサ。

働く所が ないわけなのさ。

N3:ダカラ ケッキョク トシヨリ オヤ

だから 結局 年寄りの 親

ダジイガカラフトダトカ チシマアタリサ

たちが樺太だとか 千島あたりへ

デガセギニイグノ。

出稼ぎに行くの。

T5:モー ホトンッド ネー。

もう ほとんど ねえ。

シューセン マソズ シューセンマエマデワ

終戦 終戦前までは

ホトンッド デガセギダ。

ほとんど 出稼ぎだ。

マー ズィキノモノワ マ ナ トルンダケド

まあ 時期のものは 採るんだけどね。

コンプトツタリ ネ マ

昆布を採ったり

アンタガタ サルメジトイッテモ

あなたたち「さるめじ」と言っても

ワカンナイケド ワカメトツタリ ネ

わからないだろうけれど わかめを採ったり

ミミトツタリ ホレ。 デ イマ コノ

「みみ」を採ったり。 で 今 この

トサンダジイワ キキテーノワ チャッコイ

とうさんたちは 聞きたいのは 小さい

ドギニ ノ ホレ ヨク ウチノカーサン

ときに よく うちのかあさんが

シャベンダ。

しゃべるんだ。

ドコドコデ ツギボチャイシデ アソンダ

どどこで 遊んだ

トカ ネ ウマノリシテ アソンドトカテ。
 とか 馬乗りをして 遊んだとあって。
 イヤ マズセ マド マズ ズイレインダバ
 いや (他の子供同様) ずるいんだは
 オレモ マダベンキョデキネーケドモ テンカ
 おれも また勉強はできないけれども 天下
 イッピンダダ。ウン ソノカワリィ オラノ
 一品なんだ。 その代わり おれの
 ユウコトワ ミナキクノセ。 クラスワ
 言うことには みな聞くんだわ。クラスは
 ゴジュゴニン。
 55人。

2.1.2. 幼な友だちについて

N4:ワタスネーエ タマムラノトーサンバ
 わたしはねえ 玉村のとうさんは
 オッカネーフテ オッカネーフテ。カカッテ
 おっかなくて おっかなくて。 かかって
 クッペーサ。ソレバ コノヒトガ コンド
 くるでしょ。そうすれば この人が 今度
 ネー キカネホーダダカラ コンダ
 ね きかないほうだから 今度
 ヤマーカカッテネー。イマデユエバ アノ
 今で言えば あの
 アコワナンカヤー
 あそこは何て言ったっけ？
 イルルノカワバナナテユーネー。
 入り江の川は何て言ったっけね。
 T6:サルギバ アイダ
 N5:アッコカラ オリテクンダモノ。 セバ
 あそこから 降りてくるんだもの。そうすれば
 ワダスダジィ アー ニゲルノニ
 わたしたちは 逃げるのに
 イソガシィンダ。
 大変なんだ。
 T7:ダカラ イマユートオリ ネ。
 だから いま言う通り ね。
 N6:アッコガ イジィバンナガインダヨ。
 あそこが (川の中で) 一番長いんだよ。
 T8:マズセ アノー マ キカネガッター。 ソノ
 わんぱくだった。その
 イソジィメルッテノワ ソノ
 いじめるっていうのは その
 ナンテンダガナー ソノ ソーソーユーノ
 何て言うのかな その そう言うの
 ナンモネーダヨナ ワイダチワナ。
 何もないんだよな わたしたちはね。

N7:ナンテノ セガセルッテノ。
 何て言うの あわてさせるんだよね。
 T9:ンダンダダ。
 そうだそうだ。
 N8:ダガラネ ドウキューセーダガラネ。
 だからね 同級生だからね。
 ホトンッド オーイッテバ
 ほとんど 「おう」と言えば
 オーッテインタヒョーシデ ナ ミンッナ
 「おう」っていった調子で ね みんな
 ナガイノ。 ワシダチノネー ドウキューセー
 仲がいいの。わたしたちのね 同級生
 ワネ アノー カイガラカイテネー アノー
 はね「貝殻会」って言ってね
 ナマエツケテヤッタノ イママデ。
 名前を付けてあげたの 今も(同じ呼び名で)。

Q:なぜ貝殻なのですか？

N9:ウン カイガラ。ナカノミガハインナクテモ
 うん 貝殻。 中の身が入ってなくても
 イッツモ コーアレシテ。
 いつも こうあれして。
 T10:ナガイーッテコト。
 仲がいいっていうこと。
 N10:ナガイーッテコト。 ダケド アノー
 仲がいいっていうこと。だけど あの
 ナンネンマエダ。
 何年前だった？
 T11:モー シツィハツィネンモタツヤ。ゴロクネン
 もう 7, 8年も経つよ。 5, 6年
 モタツンダ。
 も経つんだ。
 N11:モー ナナジュースギデカラ ミンナ
 もう 70歳を過ぎてから みんな
 アズバッデ ダンダンニ ヒトモイナグナル
 集まって 段々に 人もいなくなる
 シネ。ダカラッテノデ。
 しね。そういうわけで。
 T12:ジンセーノ コキノミズヲ キョウコエテ
 人生の 古希の道を きょう越えて
 ノ メザスワ ハクジュノフモトマデッテネ。
 ね 目指すは 白寿の麓までってね。
 N12:ミンナー アレシテネ。
 みんな あつまってね。

Q: 同級生の数はどれくらいでしたか？

T13:ゴジュウゴニンセ。ハナシーシテモ ハナシイ
55人だ。 話をしても 話に
ナンネンダ。ムカシ...
ならないんだ。 昔...

Q: 同級生の現状について

T14:モー ハンブンイジョーシンダ。

もう 半分以上死んだ。

N13:アトワネ ミンナナガイイヨ。

あとはね みんな仲がいいよ。

T15:「カイガラカイ」ツテネ。ユーメーダノ。

「貝殻会」ってね。 有名なの。

イヤ イマモ カイサン。トシダカラノ。

いや 今はもう 解散。 齢だからね。

N14:トシデネ。ミンナ モー イナグナッタノ。

齢でね。 みんなもう いなくなったの。

T16:コレ サイゴニ ホレ オワカレノ ネ ン

これが最後 はら お別れの

コトバーダワ アノ アイダ

言葉だ あれだ

アタマイイワルラシィー イタンダワ。 デ

頭のいい子供が いたんですよ。で

ソレ サイゴニ アノ

それ 最後に あの

ヤクバノ アノ シュウニューヤクカ

役場の 収入役かな

オカーサン。

おかあさん。

O1:ウン シューニューヤク。

うん 収入役。

T17:カドノスケナ。

「かどのすけ」ね。

ナンニ ナンニ ネンニナンカイカバ

違う 違う 年に何回ってなもんでなくて

ニカゲツニイッペーグレー

二ヶ月に一回くらい

アウンモンダンダ。

会うといった調子なんだ。

O2:ジューソーモ イカネーモンネ。

行かないもんね。

T18:イマ モー ヤンネーカラノ。 ホレ コレ

今は もう やってないからね。ほら これを

ミバ アイダ ハヂジューヨニン

見れば あれ 84人

イタツタンダ。コレ コレ ネ ネ。

いたんだ。 これ これ ね ね。

タマムラエ エーゴ ウーント。カーサンワ

玉村 栄吾 かあさんは

ドコダガニナマエアツタケナ。ナ。ウーント

どこかに名前があっただけね。 うーんと

ドコダツケカナ。

どこだったかな。

N15:ワシ アルガネ。

わたし（の名前）あるかね。

T19:イヤー アルゴトアル。ムカシノ アノアレサ

いや あるはずだ。昔の あのあれが

ノツテルンダモノ ホンダ。 ナド

載っているんだもの 本当だ。

N16:ワシィガダ ロクネンセーシカアガ

わたしたち（女子）は 6年生までしかいか

ネツガラ。

ないから。

T20:ロクネンダバ ゴネンシェーダバイッダダドコ

6年とか 5年とかそんなこと言ったっ

デ ソレコソ オメー

て それこそ おまえ

イヂネンシェーワ ホレ ショーワジューサン

1年生は 昭和13

ネンノ ヨンジューサンカイノ

年の 43回の

ソツギョーセーツテ ホレ コレ カエテア

卒業生って ほら これ 書いてあ

ルケド ナ。

るけれどね。

イツオ ゼンブヤクバデワソレヲアズベデナ

一応 全部役場では それを集めてね。

アノ アイダ ホラ

あの あれだ ほら

メンダキクエマデデル。

イワサキ

「めんだきくえ」まででている。「いわさき

ヨシエツテデデルシ。

よしえ」も出ているし。

ノ ソレゴソ。

ね それこそ。

N17:カタクナッテルベーツ。ササキ

「ささき」の名前に

ナッテルベサ。

なってるでしょ。

T21:イヤ ムカシノナメーエ ナンダツタツケ。

いや 昔の名前は 何て言ったっけ？

N18:ササギ。

ささき。

T22:オー シイタカラ ササギ・ミツエ ササギー
 おう そうだから ささき・みつえ ささきー
 マテー。
 まてよ。

Q: 学校は現在あるところにあつたのですか。

T22,N19:ウンダ ウンダ ウンダ。
 そうだ、そうだ、そうだ。

N20:コッカラ カヨツテタヨ。
 ここから 通っていたよ。

T23:コッカラ ミンナ ホレ ヨンキロハー
 ここから みんな ほら 4キロメートル
 ジイット。イマ チョットミルスケ。
 ずっと。いま ちょっと見るから。
 ホラ ミヨシミツマデデテル
 ほら みよしみつ<固有名詞?>まで出てる
 モン。ホラ ホントニ トドホッケノネ
 でしょ。ほら 本当に 楳法華のね
 コーユツテモイインダヨ。ネ コノヒトダヂ
 こう言ってもいいんだよ。ね この人たちが
 マ ドコドコサイッカイノ
 ま どここの家へ行ってね
 ホレ ハダシガヨメニナルデショ。デモ モー
 ほら でも もう
 ソノコー ワダシダヂガ ホレ ソーユー
 そのほら 私たちが ほら そういう
 「カイガラカイ」ツテユーカイヲツクツテサ。
 「貝殻会」っていう会を作ってね。
 ネ ソイデー コレ
 ね それで こう
 タトエドーローデモアレシテモ オイ
 たとえ道で会っても おい
 ツギサン イタガーデ ノ スギ
 つぎさん いたかって ね すぎ
 イタガーテ ネ。コノシト ナメー
 いたかって ね。この人に 名前を
 コー ヨビステニシテモイインダ。
 このように 呼び捨てにしてもいいんだ。
 オイ コンドワ アノ ドッカデアズバツデー。
 おい 今度は あの どこかに集まって。
 ネ アノ スコシ アノ
 ね あの 少し あの
 ダンバラコクベシヨウツテ。ノ ソシテホレ
 雑談しようって。 ね それでほら

ナンモマダカタンダンダ。

面倒なことは何もないんだ。

ウウン モー サンカゲツニイッペンハ
 ううん もう 三ヶ月にいっぺんだとか
 ゴガゲツニイッペンハ ネ
 五ヶ月にいっぺんだとか ね
 ウヂサネ イヅアズバルダトカ ヨシコノ
 自分の家にね いつ集まるだとか よし子の
 エサ イヅアズバルトカテ。ネ
 家に いつ集まるとかって。ね
 ソイデ ホレ ソコニイデ マー ヨー
 それで ほら そこに集まって まあ よう
 マ ワレワレノコドバデワ
 ま 私たちの言葉では
 クラスカイミタイノヤルワケダセ。
 クラス会みたいなのをやります。
 ソノドキニホレ ヨメシュードーツテ
 そのときにほら 嫁と姑って
 ナルンダカラ ネ ノ。ソーセバ
 なるんだから ね の。そうすれば
 「カイガラカイ」ノシトダズダバ マ
 「貝殻会」の人たちならば ま
 イゲイゲッテンダ オヤダヂモ。 マズ
 行け行けて言うんだ 親たちも。 まず
 リカイシテクレタツテコトセ。
 理解してくれたってことです。
 ダカラ アズバリヤスーガッタシ ネ マ
 だから 集まりやすかったし ね ま
 ナガイーンダ。マ ノ ダカラ
 仲がいいんだ。ま ね だから
 ソーユーノー ホレ イマタダ タダノ ソノ
 そういうの ほら 今でもただただね その
 ナガイーンデナクシテ
 仲がいいんじゃないなくて
 ソノヨーニシテ レンメントシテ ツタエテ
 そのようにして 連綿として 伝えて
 イガナキャナンネーツテコトヨ。
 いかなければならないってことですよ。
 タドエバ オレノバーイデアレバ ネ ムカシ
 たとえば 私の場合であれば ね 昔
 ナラッタセンセーガ ノ
 習った先生が ね
 シンデカラ ヤ マー コドシデジューサン
 死んでから や まあ 今年で13
 ネンタヅノカ?マズセ ノ
 年経つのか? まず ね

ソイデモ センセシンデイナクテモ ネ
 それでも 先生が死んでいなくても ね
 オメダノトーサンニ
 あなたのおとうさんに
 ワダヂナラッテ アリガトゴザイマシタ
 私たち習ったんだよ ありがとうございました
 ッテ イヂネンニイッペン
 って 一年にいっぺん
 カナラズ ハコダテノ シヨシチョニマデ
 必ず 函館の 日吉町まで
 イッテクルンダワ。 マズセ ノ マ
 行ってくるんですよ。まず ね ま
 トーゼンイギデタトキモ ノ イッタシイ。
 当然生きていたときにも ね 行ったし。
 マズセ ソノセンセニガテ
 まず 先生から見ても
 オラ ベンキョーデキネーベシイ オラノジ
 私は 勉強ができないしさ 私の字を
 ミタラワガルベセ。 ノ シタラ
 見たらわかるでしょ。ね そうしたら
 オメーカイダンドネーッテ オラカガネー
 おまえが書いたんではないって 自分が書かな
 ダッテ ミナシテカイデケルンダモン。
 くても 皆すすんで書いてくれるんだもの。
 センセー コレサ ナ アレ アノー イー
 先生は これに ね あれ あのう よい
 テンスーケヤルドモノ
 点数をあげてもいいんだけども
 セーセンダモノ テンスーケルワケニ
 先生だからね 点数をあげるわけには
 イガネベセ。 コンド ツーシンボ
 いかないでしょ。今度は 通信簿も
 モラッテクルベセ。 シタラ オラノヤヅ
 もらってくるでしょ。そうしたら 私のやつは
 ツーシンボミレバ ヘガ アノー
 通信簿を見れば 丙が あのう
 オツバカリダモノ。オオオ マズナ マズネ
 乙ばかりだもの。 おおお まずね まずね
 ソスバ イエサカエッテキテモ
 そうすれば 家に帰ってきても
 ネ ムカシノオヤッテノワ ネ ソノ
 ね 昔の親というのは ね その
 ワラサンドワ ノ ガッコ
 子供というのは ね 学校
 ドンテデネーダ
 どうだこうだっていうんではないんだよ

トーサン ミナ イッタトーリセーカツニ
 とうさん みんな いま言った通り生活に
 オワレテルモンダカラ。
 追われているものだから。
 ネ ノ ナンモ マ イヅィガッキノドギデモ
 ね ね なにも ま 一学期でも
 ニィガッキノドギデモ ネ ノ
 二学期でも ね ね
 ババデモ トッチャンデモ イネコマ
 ばあちゃんでも とうちゃんでも いない間
 ニィ。アノ ツィ ナンダッケ。
 に あの 通 なんだっけ。
 チャント オヤサミヘダッテユー ハンコ
 ちゃんと 親にみせましたという はんこが
 アルベセ。 ナンモ ジブンデハンコ
 あるでしょ。へっちゃらで 自分で はんこを
 オシイテセ。 ノ ネ。サンガッキナレバ ネ
 押すわけです ね ね。三学期になれば ね
 マズイセ アノー アノ
 まずね あのう あの
 フロスイキ コーモッテサ デ ソレサ
 風呂敷を こう持ってね で そして
 ツィーシンボモナンデモ
 通信簿でも なんでも
 ナツヤスミチューカ フユヤスミチュー
 夏休み中か 冬休み中に
 クルンダ。ソイバ オレ
 来るんだ。そうすれば 私は
 ゲンゴエノカワデ ノ ミレバ ノ
 げんごえ(地名?)の川で ね 見れば ね
 ワガルトイッタヨネモンダ。
 (成績が)わかるんだよ。
 ジーミダラワカルベ。
 字を見たらわかるでしょ。
 ヘーカオツヨリケネンダモン。ソイデコンド
 丙か乙しかくれないんだもの。それで今度
 ゲンゴノカワサ ミナ
 げんごの川で みんな
 コーサイテサー ポント コレ ナゲ
 こんな風に破ってさあ ぽんと これを 捨て
 ルテケル。マズネ ソンドギニ
 てしまう。まずね そのときに
 ウヂサキテモ イマイッタバカリデシヨ。
 自分の家に帰っても いま言ったところでしょ。
 ヤー キョーツィーシンボドーンダッタガトカ。
 やあ 今日の通信簿どうだったかとか。

ナーンモゼンゼンゼン。 ナ マズセ
 なにをきかれましたってへっちら。ね まずね
 マー ダカラソレガタダシイガッタモノヤラ
 まあ だからそれが正しかったものやら
 ノ ヤレ キョーイグママッデワガルデシヨ。
 ね ほれ 教育ママってわかるでしょ。
 ネ ソレガタダシィーモノヤラ。
 ね それが正しいものやら。

N21:アマリキビスイクネカッタカラネー。

あまり厳しくなかったからねえ。
 コドモモ マダヒトリデ オガッタトイッタ
 子供も また 一人で 育ったといった
 ヨーナ モンデ。
 ような もんだね
 イマダラ ミンナカエッテイマノホーガ
 今の方が みんなかえって今の 方が
 ワルイコトガ オキテルンデネー。
 悪いことが 起きてるんじゃないの。

T24:ウンダ。 オラダデノードーキューセーデナ

そうだ。 私たちの 同級生でね
 ハンザイ オカシタ コドモダデ
 犯罪を 犯した 子供なんて
 キーダゴドモネシ。
 聞いたこともないし。

2.2. 覚書

本節では上記の談話の中に現れた興味深い事実を取り上げる。

2.2.1. 就職口

まず玉村氏や長政氏が若かった頃には、楯法華村には簡単に就ける就職口がなかったことが語られている。玉村氏のように船大工の弟子に行ったり⁽¹⁾⁽²⁾、今も盛んな漁業にたずさわったりしないかぎり、村外に働き口を求めるしかなかった。長政氏のような女性の場合には、つてをたどって本州へ行き紡績に関わる仕事をしたという。福井県という地名が挙げられているのは、楯法華村に入植した人たちの出身地だったからである。

また定職の他に現在のアルバイトにあたる日雇いの仕事も無かった。このような短期の仕事には、漁が一段落した漁師の需要もあったと考えられる。しかしそれが不可能だったため、樺太や千島に出稼ぎに行ったという。

ちなみに2004年3月に行った最新の調査によると、樺太や千島に出稼ぎに行く際には、まず函館に行き、そこで大きな船に乗り換えて目的地に向

かったそうである。

少ないながらも挙げられている働き口としては、決まった時期に水産物を採ることである。例としてコンブ、ワカメという良く知られているものや、「サルメジ」や「ミミ」といった地元の人にしか知られていないもの、また春の「カツオ干し」が挙げられている。

また以前伺ったところによると、現在では冬になるとスケソウダラが採れるので、それを網からははずす仕事があるという。

2.2.2. 貝殻会

次に玉村氏と長政氏の幼い頃の様子語られ、その後、同窓会「貝殻会」の話へと移っていく。

小学生の頃には玉村氏は同級生のまとめ役だったとご自身の口から語られ、長政氏は玉村氏に「せかされ」で「おっかなかった」と証言している。

同窓会である「貝殻会」は当初84人いたという同級生によって構成されていた。このような組織が他の学年や世代に存在していたかは不明だが、少なくとも玉村氏と長政氏の学年の人たちがこのような組織を作り、村の中でも認知され、「有名だ」ということが談話から分かる。

貝殻会は現在人数の減少により解散してしまっているが、往時は数ヶ月に一度の頻度で開かれていた。

外出中に同級生が会おうと名前を呼び捨てで呼び合い、「ダンバラコクベシヨ（雑談しよう）」と誰かの家に集まることになる。その際に男性はさておき、お嫁に行っている人が家の仕事をせずにクラス会に行くということは、姑に気を遣わなければならないことであり、あまり良くは思われな行為であっただろう。しかし貝殻会の人には「行け行け」と言ってくれたのである。このことは貝殻会が村の社会のなかで認められ、その組織に属していることによって一定の行動の自由が得られたことを意味している。

貝殻会のもうひとつの役割は、玉村氏の言葉に従うと「連綿として伝えてい」くということが挙げられる。一つの実例として恩師との関わりが挙げられている。

いわゆる同窓会に恩師を招いたりすることはしばしば行われる。しかし貝殻会の場合には、一年に一度函館市日吉町まで恩師を訪ねていた。さらにその恩師が亡くなった後も、恩師の家を訪ね、恩師の家族に、「あなたのおとうさんに私たち習ったんだよ。ありがとうございます」と謝意を表しに行っ

たという。

玉村氏の言う「伝えていく」ということには、「毎年続ける」ということと、「恩師の次の世代にも続けていく」ということの二つがあるようである。

貝殻会の後の話では、学校における恩師と玉村氏とその友人たちとの関わりと、親たちの学業成績への態度が語られている。

玉村氏自身によると、あまり勉強は得意ではなかったそうだが、(おそらくテストや課題の時に)周りの子供たちが「皆進んで書いてくれた」という。しかしそれは字体から恩師にはすぐ分かることであった。

先生としてはやはりいい点を付けることはできない。そこで通信簿を見るとやはりあまり良い評価はついていなかったのである。

しかし子供たちはさほど気にとめていなかったように思われる。というのも家族が良い点数を取ってくるということにそれほど執着していなかったからである。通信簿に自分で印鑑を押して持っていたり、さらには破って川に捨ててしまうという話には笑いを誘われるけれども、それでもひどく叱られたということもないことから勉学に関して格別厳しいというわけではなかったことが窺える。

3. 「マズ」について

樞法華方言に特徴的な表現として「マズ」がある。この表現は談話標識として機能する。発音上は「マズ」の他に「マズィ」「マンズ」のように聞こえることがある。この表現は樞法華方言のみに観察されるのではなく、他の道南方言や東北方言にも見いだされるものであるが、北海道方言でも都市部の方言話者はあまり使わないものである。

本稿であつかった談話資料の中に「マズ」は14回現れる。内訳は以下の通りである。

表1 「マズ」の出現形と回数

	回数
マズ	3
マンズ	1
マズセ/マズィセ	7
マズナ	1
マズネ	2

表1によると、今回現れた「マズ」のうち半数は文末詞「セ」を伴っている。次に多いのが「マズ」

のみで現れているもので、残りは少数になっている。

「マズ」の音性的特徴としてはイントネーションと中舌母音が挙げられる。

「マズ」そのもののアクセントは「高低」である。そしてイントネーションがかかると「ズ」が長く発音されることが多くなる。その場合本来の低いアクセントのまま延ばされる。途中で高さは変化しない。一方文末詞の付加された「マズセ」や「マズナ」「マズネ」は文末詞の高さが変化し「高低高」となる。そのためちょうど疑問イントネーションのような音調曲線となる。この点は、たとえ「ズ」が長音化されたとしても低いままの「マズ」と対照的である。

この差異はおそらく機能上の違いを反映している。「マズー」と文末詞が無く最後が高く発音されないものは聞き手への伝達機能はあまりなく、話者の発話がまだ続くということを示しているに過ぎない。一方文末詞が付加されイントネーションが変化しているものは、明らかに聞き手への確認の意図が含まれている。

今回の調査で気がついたことだが、「マズ」はひょっとすると丁寧さを含意するかもしれない。特に今回はインタビュー形式を取ったので聞き手に対する配慮として「マズ」が使われた可能性がある。というのも玉村氏と長政氏の会話において「マズ」が使用されなかった。また恩師の話が始まったところで「マズ」が使われだしたということも、話者の意識の上で何らかの変化があったのかもしれない。この点に関してはさらに調査する必要がある。

次に中舌母音に関して考察を行う。樞法華方言には2種類の中舌母音 [i] [ui] があり、通常は区別して発音されている⁽³⁾。ただし共通語と比較するとどちらの母音も中舌母音の特徴である音質の曖昧差を有しており、時には混同が起こるとされている⁽⁴⁾⁽⁵⁾⁽⁶⁾。特にいわゆる四つ仮名と呼ばれる「シ」と「ス」、「チ」と「ツ」、「ジ」と「ズ」、「ヂ」と「ヅ」の区別が曖昧であると言われている⁽⁷⁾⁽⁸⁾。

今回の調査では、第2節の談話テキスト作成者は「マズ」のように「ズ」と表記している。しかし島田(2003)によると、樞法華方言の2種類の中舌母音はどちらも中舌の位置から /i/ の方に接近した位置で調音されている。その場合「マズ」は「マジ」あるいは「マズィ」とも表記できそうである。そこでこのことを確認するため音響分析を試みた。

音声の録音及び解析に情報は以下の通りである。録音は SONY 社製 DAT レコーダ TCD-D100、同社製エレクトレットコンデンサマイクロフォン ECM-MS907 を用い、サンプリング周波数

44.1kHz で行った。実施場所は楡法華村の玉村氏の自宅である。音声を録音後 Synttrillium 社製 Cool Edit 2000 を用いてサンプリング周波数 8000Hz にダウンサンプリングし、それを NTT アドバンテックテクノロジー社製 SPWIN Pro Version 2.0b を用いてスペクトル解析および LPC 解析を行い、第 1 フォルマント(F1)、第 2 フォルマント(F2)、第 3 フォルマント(F3)の値を求めた。

はずれ値を除いた結果は以下の通りである。

表 2 「マズ」の中の「ウ」のフォルマント周波数 (Hz)

	F1	F2	F3
mazu01	405	1567	2374
mazu02	374	1586	2963
mazu03	349	1515	2658
mazu04	468	1592	2157
mazu05	376	1659	2451
mazu06	349	1624	2474
mazu07	380	1592	2468
mazu08	349	1628	2476
mazu09	351	1530	2157
mazu10	376	1628	2518
mazu11	292	1596	2401
mazu12	317	1624	2445
mazu13	298	1540	2248

表 2 のデータを元に平均値を計算すると表 3 のようになる。

表 3 フォルマント周波数の平均値 (Hz)

	F1	F2	F3
平均値	360	1591	2445

この値と島田(2003)で求められた [i] と [ü] のフォルマント周波数の平均値とを比較すれば前よりの母音か後ろよりの母音かが判断できる。

表 4 四つ仮名環境以外の F 1, F 2, F3(Hz)

	F1	F2	F3
[i]	322	1624	2416
[ü]	400	1272	2294

表 3 と表 4 を比較すると「マズ」の「ズ」の中に現れる母音は F 1 に関してはちょうど [ü] と [i] の中

間で、F 2 と F 3 に関しては [i] に近いことが分かる。仮に「マズ」を聞いた場合に F 1 の周波数に注目すれば [i] と [ü] の区別が曖昧ということになるだろうし、F 2 と F 3 に注目すれば [i] に近いということになるだろう。

ただしここで注意しなければならないのは、[i] と [ü] はともに中舌母音であるということである。中舌母音を特徴づける中舌性というのは F 2 と F 3 に反映されると考えることができる。というのも中舌性を F 3 の値を F 2 の値で割った値(F3/F2)が中舌の位置を反映していると見ることができる報告があるからであり、1つの予測として楡法華方言の四つ仮名環境においては [i] が現れるとされている^③。

そこで表 2 のデータから F3/F2 値を導き、先行研究と比較してみることにしたい。

表 5 「マズ」の中の「ウ」の F3/F2 値

	[i]	[ü]	「マズ」の中の「ウ」
平均値	1.5	1.84	1.54

表 5 を見ると舌の前後位置に関しては [i] に近いことが明らかである。少なくとも「ジ」と「ズ」の現れうる環境においては [i] が現れると言える可能性が大きくなった。

しかし今後の課題としてはその他の四つ仮名環境における検証が必要である。

4. 結語と今後の展望

本稿では楡法華村における方言の緊急調査の第 3 回目の報告を行った。そのなかで同窓会である「貝殻会」や恩師との交流、勉学に対する親の態度など、学校と生徒を軸にした話と、就職口が無く、本州や樺太、千島へと出稼ぎに行ったという卒業後の話が語られた。

今後の展望としては、緊急に記録しておかなければ失われてしまう戦前の生活について調査を進めたいと考えている。例としては今回の出稼ぎの続きともなる戦前の漁師の生活や子供たちの生活などが挙げられる。

緒言でも触れたように 2004 (平成 16) 年の 12 月をもって楡法華村は函館市と合併する。このことは行政上の統合のみを意味する出来事ではない。それよりももっと文化的な意識としての統合を

も引き起こすと考えられる。少なくとも若い世代において假法華村出身という意識は近い将来には無くなってしまいうだろう。調査の緊急性は増すばかりである。

謝辞

本研究に当たり玉村栄吾氏と長政スゲ子氏には調査協力者として長時間にわたるインタビューを快諾して下さったのを始めとして限りない協力を賜りました。この場をお借りして篤く御礼申し上げます。

また調査協力者の選定、過去の資料の閲覧等に際しては假法華村教育委員会の方々にお世話になりました。ここに篤く御礼申し上げます。

本研究は平成12年度室蘭工業大学CRDセンタープレ共同研究「道南渡島東岸部方言の緊急調査」の助成を受けています。

文献

- (1) 島田武、橋本邦彦、寺田昭夫、塩野亨著「假法華(とどほっけ)における言語と風習-失われゆく伝統」室蘭工業大学紀要第51号 pp173-182, (2001).
- (2) 島田武、橋本邦彦、寺田昭夫、塩野亨著「假法華(とどほっけ)における言語と風習-失われゆく伝統」室蘭工業大学紀要第53号 pp87-97, (2003).
- (3) 島田 武, 假法華方言の中舌母音について, 認知科学研究第2号, p59-74, 室蘭認知科学研究会, (2003).
- (4) 五十嵐三郎, 北海道方言の概説, 講座方言学4-北海道東北地方の方言-, p1-62, 国書刊行会, (1982).
- (5) 石垣福雄, 日本語と北海道方言, 北海道新聞社, 札幌 (1977).
- (6) 石垣福雄, 北海道沿岸部の方言, 講座方言学4-北海道東北地方の方言-, p63-92, 国書刊行会, (1982).
- (7) 沢哲夫, ほっかいどう語-その発生と変遷-, (五十嵐三郎, 長谷川清喜, 佐藤誠, 石垣福雄, 渡辺茂監修), 北海道新聞社, 札幌 (1970).
- (8) 平山輝男, 小野米一, 石垣福雄, 道場優, 北海道のことば』明治書院, 東京, (1997).

付録

以下に本稿で分析した母音のスペクトルを挙げる。各図中には矩形波状のスペクトルとスペクトルを滑らかにつないだ LPC の波形が描写されている。本文中で言及した F1、F2、F3

は LPC の波形を元に計測されている。LPC の波形が見づらい場合があるのでインデックスを付した。

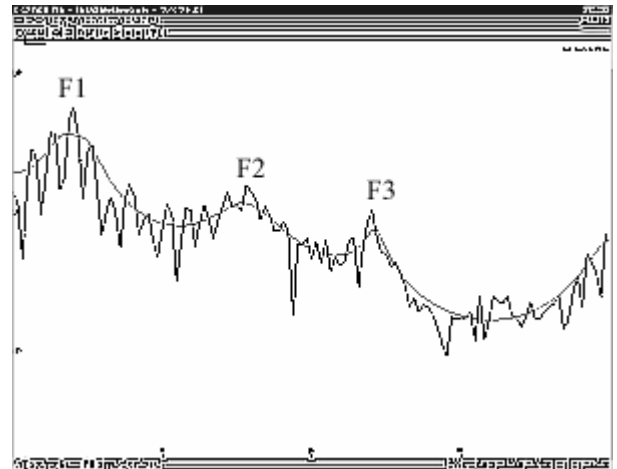


図1 mazi01

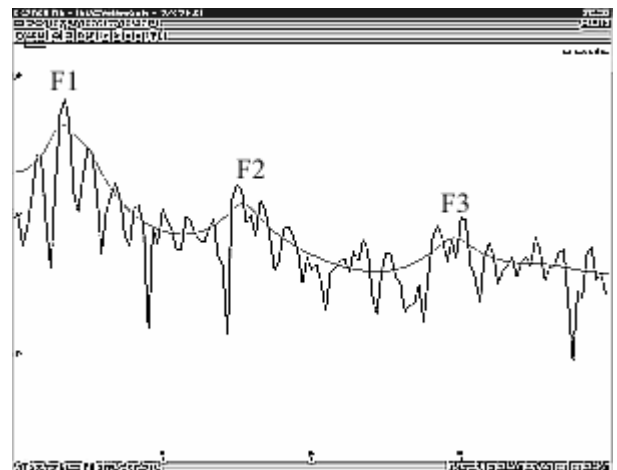


図2 mazu02

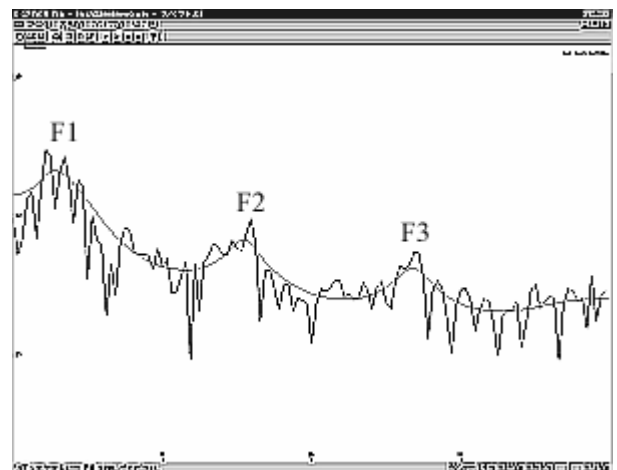


図3 mazu03

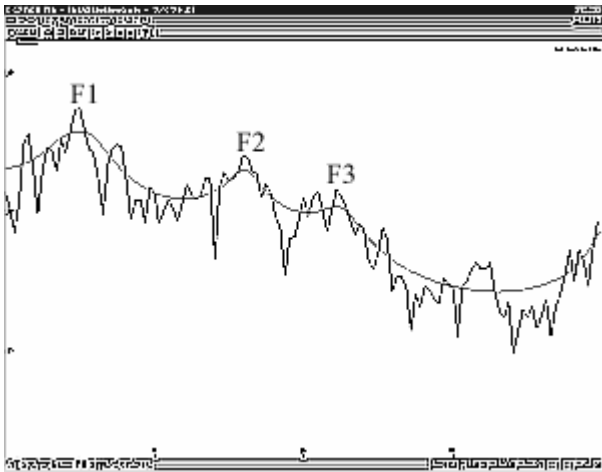


図 4 mazu04

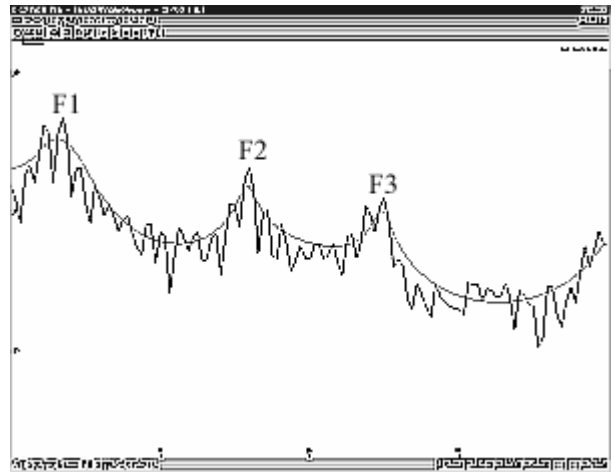


図 7 mazu07

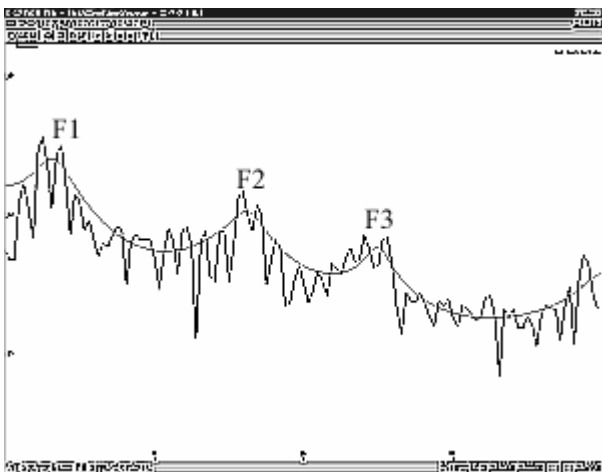


図 5 mazu05

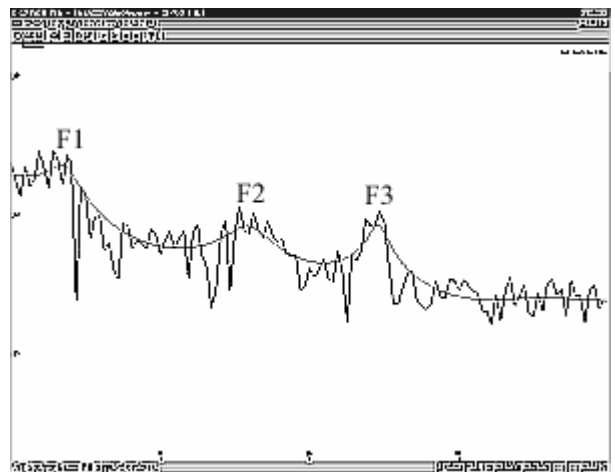


図 8 mazu08

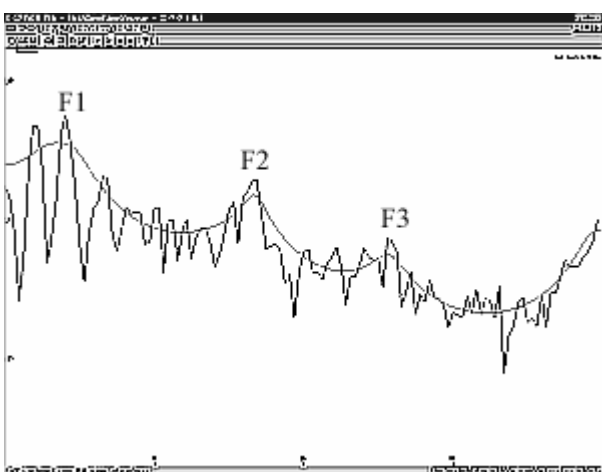


図 6 mazu06

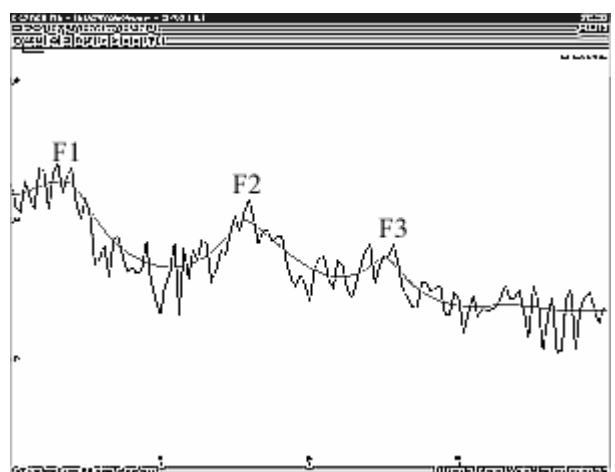


図 9 mazu09

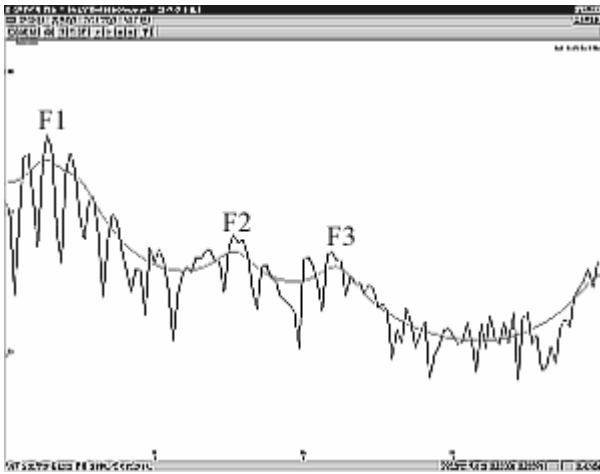


図 10 mazu10

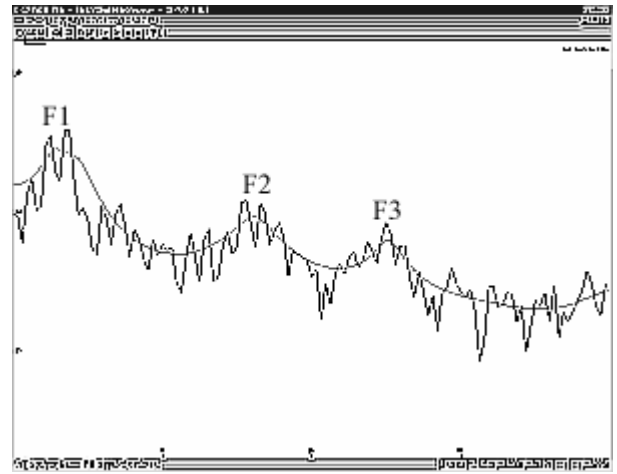


図 13 mazu13

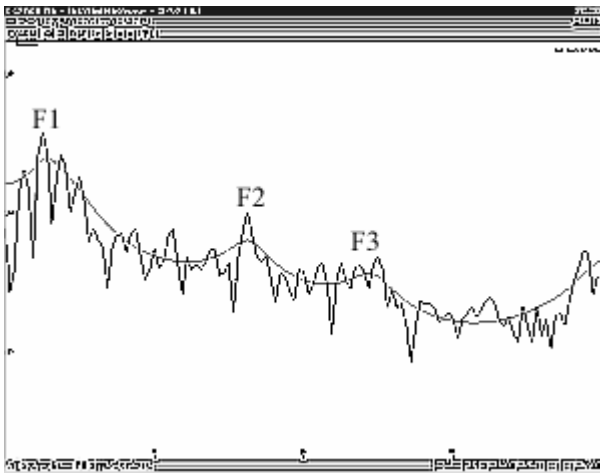


図 11 mazu11

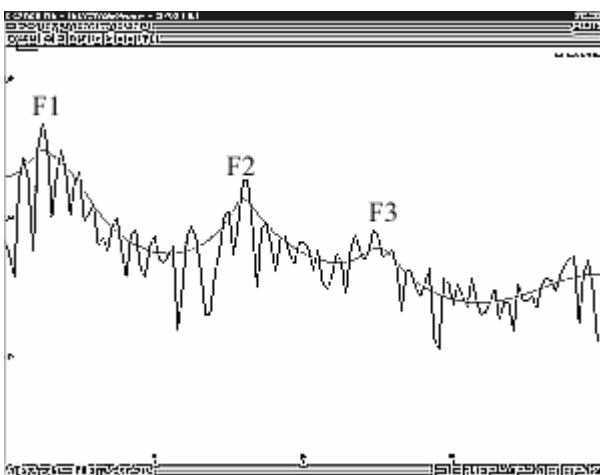


図 12 mazu12